

日本の中の酒田～来訪者が見た湊町さかたの情景～

令和6年5月18日（土）～7月21日（日）

江戸時代の寛文12年（1672）、出羽国の御城米（幕府直轄地の年貢米）を江戸に運ぶため、河村瑞賢によって西廻り航路が整備されました。最上川の河口に位置し、航路の起点となった酒田は、日本海交易の拠点として発展を遂げ、日本有数の湊町として広く知られるようになりました。その情景は、来訪者の目にはどのように映ってきたのでしょうか。

本企画展では、江戸時代から明治、大正、昭和にかけて酒田を訪れた人々が記した紀行をはじめ、酒田・庄内の景色を描いた絵や版画など、往時の酒田のにぎわい、湊や町の風景、人々の暮らし、食や文化などを伝える資料を紹介します。

庄内藩を揺るがした天保の「三方領知替」の資料であり、当時の酒田の様子を、幅9.7メートルの幕に生き生きと描いた、^{さいどうえまく}塞道絵幕^{おすわりだいさいじ}「大壽和里大祭事」（酒田市指定文化財）も展示しています。

改めて酒田の特色・魅力を知る機会になれば幸いです。

江戸時代に描かれた酒田の風景



酒田市指定文化財
さかたそでのうらこやのはまのず
酒田袖之浦小屋之浜之図
(複製)

江戸時代中期

(公財)本間美術館蔵

酒田を描いた絵図としては、現存する最古級の絵図です。港口を中心に、山王社（下日枝神社）や神明社（皇大神社）などの寺社、公方様御穀積所（河村瑞賢が造らせた幕府領米置場）などが描かれています。本町通りを中心とした町並みは現在もほぼ変わっていません。

本間光丘などによる砂防林の植林はまだ始まっておらず、町の北側には黄色い砂地が広がっています。



二代歌川広重 錦絵

左：「諸国名所百景 出羽鳥海山」万延元（1860）年

右：「諸国六十八景 出羽鳥海山」文久2（1862）年

広重が現地を訪れて描くことはほぼなかったといわれます。この錦絵も描かれた鳥海山も実際の姿ではありませんが、日本海から鳥海山を望む雄大な景色は、名所に数えられていました。



酒田の豪商鑑屋を紹介

い は ら さい か く に ほ ん え い た い く ら
井原西鶴『日本永代蔵』 貞享5(1688)年

知恵と才覚で富を築いた町人の話などを、フィクションも交えながらおもしろく書いた浮世草子（江戸時代の小説の一種）です。「北国一番の米の買入れ問屋」として、鑑屋の豪商ぶりを紹介しています。絵には、客間と、巨大な釜から大杓子でご飯を手桶に移したり、魚を焼いたり、使用人が忙しく働く台所の様子が描かれています。



旅宿と商店のガイドブック

あ ず ま こ う あ き ん ど か が み
『東講商人鑑』 安政2(1855)年

東講は江戸の商人・大城屋良助が創設した、東日本を中心とした旅宿と商店の組合です。加盟できたのは、一定水準を満たした優良な宿と、旅の要所にあった各種商店。それぞれに番号がつけられていました。

加盟した宿は店先に目印の札を掲げ、宿泊する加盟者は番号を記した鑑札を見せて、身分を証明しました。安全に旅行したい旅人にとっても、宿泊客とのトラブルを避けたい旅宿にとっても、ありがたい仕組みといえます。

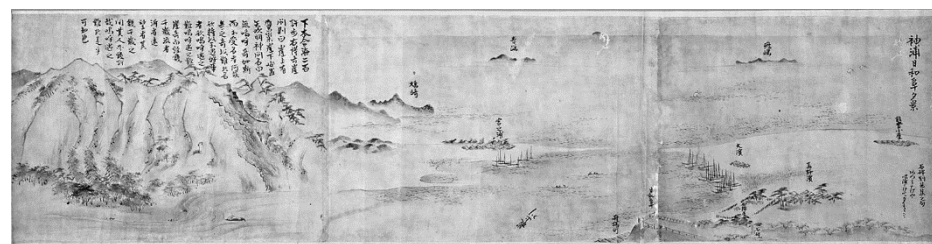
その加盟者リストが『東講商人鑑』です。2800店に及ぶ加盟店名が掲載されているほか、町や名所の絵図も多数あります。酒田も町並み図入りで紹介されています。

購入できたのは加盟者だけですが、旅行ガイドブックとしても重宝されました。



鑑屋の東講鑑札

東講に加盟した鑑屋の鑑札。番号は600番でした。東講商人鑑には「六百番 本町三丁目 諸荷物積問屋 酒田 鑑屋惣右衛門」とあります。



のぞきよしまさ 荻戸善政「酒田往復記録」

寛政6年(1794)

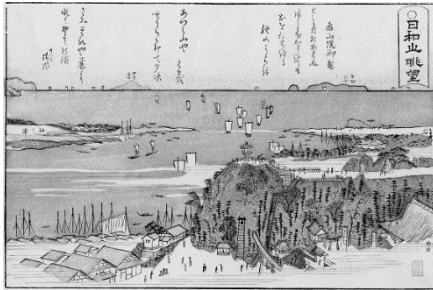
(公財)本間美術館蔵

米沢藩の家老・荻戸善政は、上杉鷹山に託されて藩の財政改革に取り組んだ人物です。寛政5(1793)年、善政はまず2500両の資金援助を本間家に相談し、当時当主だった光丘の快諾を得ました。善政はこの資金を使って農村復興などの事業を進めました。

翌年7月、光丘に直接お礼をするために酒田を訪れた善政が書いた日記と絵です。

酒田に10日間ほど滞在した善政は、光丘の案内で山王社(下日枝神社)を訪れたり、日和阜(日和山)からの夕景を見たようです。日記には「日和阜に於いて納涼、夕景言うべからず」と記録しています。

日和阜に方角石が描かれた絵図としては最古のものです。



さかたみやげ 木版 酒田十景

文久年間(1861～64)に、本町一丁目の五十嵐仁左衛門が、絵師・五十嵐雲嶺に酒田の名所を描かせてお土産として売り出した10枚組の版画。版木は本間美術館に所蔵されています。展示しているのは昭和62(1987)年に同美術館が版木を使って制作した複製版です。

本間家本邸などが並ぶ本町通りが描かれた「本町通景」の右上には「出羽の国酒田に城あり亀か崎の城といふ…」と、酒田についての紹介文があります。左側には版画全体のタイトルと思われる「酒田風景図」と書かれ、「売ひろめ^{ところ} 庄内酒田 本町^{いっちょうめ} 一からしや 仁左衛門^し 梓」と、版元についての記載もあります。

江戸時代に訪れた旅人もこの版画を買って、酒田を思い出していたかもしれません。

上段向かって左から「本町通景」^{こやのはまおおふね}「高野濱船」。下段向かって左から「日和山眺望」「鶴田口雪」「妙法寺鐘」。

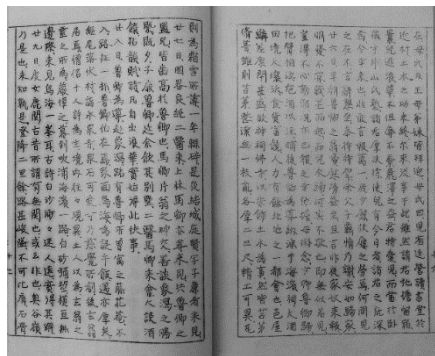


ごうんていさだひで
五雲亭貞秀 錦絵「出羽庄内酒田風景図」 元治元(1864)年

画面手前に広がっているのは鶴岡城下の家並。中央に描かれた酒田湊と酒田の町並みの後ろに鳥海山がそびえ、遠く男鹿半島を望んでいます。実際の地形とはまるで違いますが、三枚続きの大きな画面を生かしたダイナミックな構図から、酒田湊のにぎわいが伝わってくるようです。

貞秀は歌川国貞の門人で、俯瞰図を多く手掛けています。

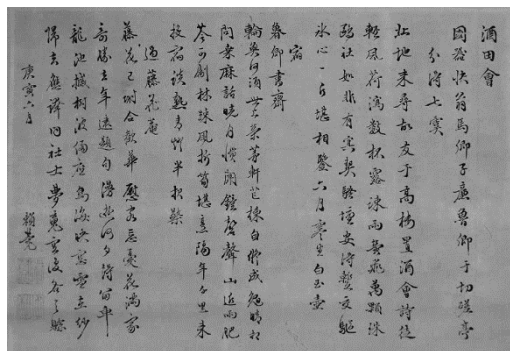
江戸時代の来訪者が見た酒田



らいしゆんすい ふけんろく
賴春水『負剣録』 (写本)

賴春水は広島藩の儒学者で、儒学者・歴史家として有名な賴山陽の父。
 明和7(1770)年、大坂に暮らしていた春水は、父親に随行して富士山、
 仙台松島、象潟、善光寺などの名所を巡る旅をしています。『負剣録』は
 その紀行です。

大坂でともに儒学を学んでいた曾根原省吾(魯卿)に会いに酒田を訪れ
 ており、酒田の印象や滞在中の出来事を記しています。



酒田市指定文化財

賴春水 書簡 酒田詩会宛 明和7(1770)年
 (公財)本間美術館蔵

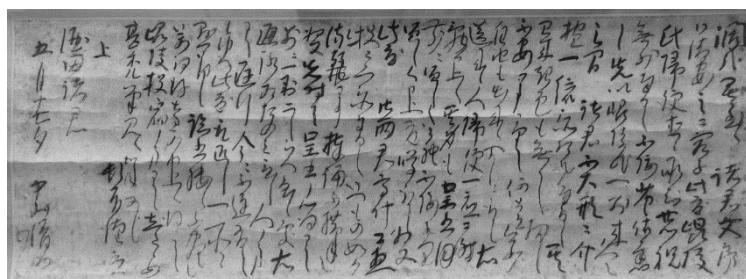
酒田滞在中に、詩会などを通して交流を持った、酒田の文人で医
 師の伊東国器(見璞)と中川良純、代々酒田の町年寄を勤めた上林家
 の分家で、酒田で漢学の普及に努めた上林馬卿(白水)、友人の曾根
 原魯卿などの名をあげて唱和した詩を書いた書簡です。

賴春水が見た酒田 明和7(1770)年6月25日に来酒

春水が酒田を訪れたのは明和7年6月25日。大坂の儒学者・片山北海の下でともに学んだ曾根原魯卿に
 会うためでした。曾根原家で歓待を受けた春水は魯卿と旧交を温め、当時の酒田の文人たちと詩会を催すな
 どして、充実した時間を過ごしました。途中6月28日に象潟に行き、^{うるう} 閏6月1日に再び酒田に戻って5
 日に酒田を離れました。

酒田の印象を「夫酒田境大壤沃、食貨富饒、人力有余、北地之一都会也、邑屋鱗差、廩閑甚盛」(酒田
 は土地が肥え、食べ物とお金が豊かで人の力もあり余っている北の都会。民家が立ち並び、米蔵も多くあ
 る)と書いてあり、当時の酒田の繁栄ぶりが伝わってきます。

賴春水 延享3(1746)年～文化13(1816)年



酒田市指定文化財

^{なかやまこうよう}
中山高陽 書簡 年代不明

賴春水来遊から2年後の明和9(1772)年、詩人・南画家として知られた中山高陽が酒田を訪れました。
 春水と同じく、松島、象潟の名勝をたどる道中に立ち寄り、旧交のあった篆刻師・石川崑陵や上林白水、曾根
 原魯卿、伊東見璞などと詩会を開いて親交を深めました。

高陽は江戸の大火で家が類焼したのをきっかけに旅を思い立ちましたが、酒田でも二三五五戸が焼けた大火
 があったばかりでした。到着した日に泊まった宿は、仮設のあばら家だったと、著書『奥游日録』に書いてい
 ます。

この書簡は、酒田の文人たちに送った礼状です。



たちばななんけい
橘南谿『東遊記』一之巻

寛政7(1795)年

橘南谿は江戸時代後期の京都の医師。薬草採取のために弟子の用軒を連れて日本各地を漫遊し、見聞きた諸国の珍しい話をまとめた紀行『東遊記』『西遊記』は、江戸時代の紀行文学の中でもよく知られていました。

酒田では宿に一泊しただけで、早々に吹浦に向かっていますが、吹きつける砂で散々な目にあったことが記されています。

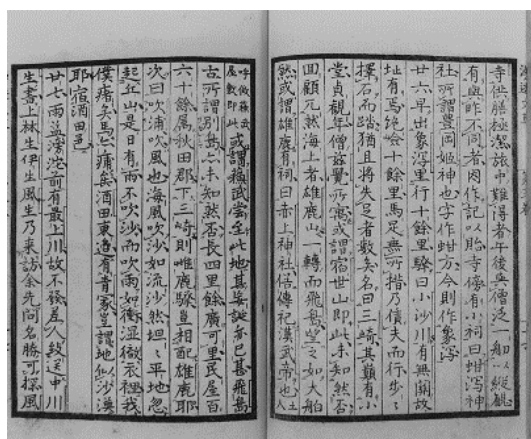
橘南谿が見た酒田 天明4(1784)年3月21日来酒

天明(1784)3月21日に酒田に入り一泊した南谿と弟子の養軒は、翌朝早くに吹浦に向かって出発します。この時、1、2里も進んだ頃から強い北風でおびたしい飛び散り、歩くこともままならなくなるという体験をしました。『東遊記』には、この時のことが「吹浦の砂磧」として収められています。

家も田畑も見えず、左に日本海、右に鳥海山を望む広大な砂丘の道で、天地が真っ暗になるほどの砂に吹きつけられた南谿。後ろに続く養軒の姿は見えず、互いに声をかけ合い手をつないで進みましたが、前も後ろもわからなかったことなど、砂の怖さを克明に書いています。

こうした砂の害をなくすために、本間光丘をはじめ、酒田で酒造業を営んでいた佐藤藤蔵、その甥の曾根原六蔵、平田郷大町組の大庄屋だった尾形庄蔵らが、長い年月をかけて砂防林の植林事業に取り組み、戦後の国による海岸砂丘地造林事業での植林も合わせ、現在の庄内砂丘には緑の松林が広がっています。

橘南谿 宝暦3(1753)年～ 文化2(1805)年



ひらさわきよざん まんゆうぶんそう
平沢旭山『漫遊文草』三巻 寛永元(1789)年

平沢旭山は生涯に3000編の文章を書き、幸田露伴もその文章を愛好したという江戸時代中期の儒者・文章家。頼春水、橘南谿たちばななんけいと同じ時代を生きた人です。

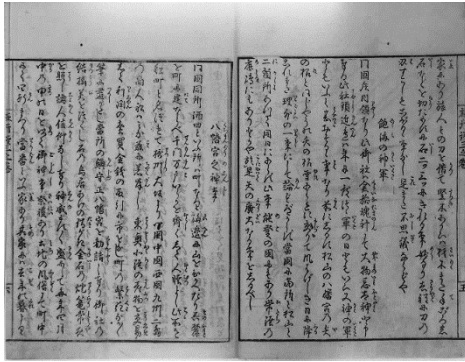
『漫遊文草』には、安永7年(1778)に来酒した時のことが出てくる「游奥歴」という文章が収められています。

松前から秋田・象潟を経て酒田に入ったのは7月26日。降り続く雨のために2日間とどまり、29日に最上川を上って行きました。滞在中に酒田の文人たちと歓談し、その時に借りた酒

田の地誌を、翌日昼頃までかかってむさぼり読んでいます。

その地誌から引用して「其地海舶輻湊スル所ニシテ、其水次ヲ袖浦トイフ、国歌ノ詠モトヨリ多シ」と記しています。酒田には各地から船が集まり、船着き場の袖浦は昔から和歌に多く詠まれている…といったところでしょうか。

平沢旭山 享保18(1733)年～寛政3(1791)年



まついじゅかくさい

松井寿鶴齋『東国旅行談』三 天明9(1789)年

作者の松井寿鶴齋の経歴は不明です。

天明7(1787)年に書かれた序文には、故郷の武蔵から松島見学に出かけ、その道すがらに見聞きた珍しいことなどを書き留めたと記しています。酒田については、山王祭や特産の花紋燭(絵口ウソク)などを取り上げており、当時の酒田の風習や生活の様子が垣間見える資料になっています。

まついじゅかくさい

松井寿鶴齋が見た酒田 来酒年不明

松井寿鶴齋は経歴が不明で、来酒時期も分かりませんが、好奇心旺盛な人物だったのか、さまざまなことを見聞きたらしく、酒田については「八幡宮の神事」「暑中の雪」「^{かもんしよく}花紋燭」「鳥海山」など9つの話を書いています。

「八幡宮の神事」は酒田山王祭のこと。「海浜に山をひかへたり、其麓を町に立てならべ(中略)東奥北陸の産物を交易して利潤の売買金銭の取引に市をなし、町の繁花なかなか筆に尽がたし」と酒田を紹介し、山王祭の神宿選びのこと、山車行列の華やかさについても詳しく書いています。

「暑中の雪」は、西南にある山の陰になっている浜の砂を掘って雪解けの頃に囲い置き、夏になると、魚屋がこの雪を買い、魚を入れる桶などに敷き詰めていたという、興味深い話です。「花紋燭」は絵口ウソクのこと。酒田では本町一丁目にある家で作っており、「当国当所のさらし蠟は日本一の名産にして至^{いたつ}て色しろく雪のごとし」と絶賛しています。



ふるかわこうしょうけん

古川古松軒『東遊雑記』(写本)

幼いころから地理学を好み、オランダの書物で測量術を学んだ地理学者で旅行家の古川古松軒は、全国を旅して学問的な考察を加えた紀行を多数執筆しています。東遊雑記は、天明8(1788)年、江戸幕府の巡見使に随行して東北から蝦夷地(北海道)を視察した時の記録。その写本です。

古川古松軒が見た酒田 天明8(1788)年6月28日来酒

天明8(1788)年5月6日に江戸を発った巡見使一行は、福島、山形を経て最上川を下って庄内に入りました。鶴岡から羽黒山に参拝し、小国、鼠ヶ関、温海、大山を通り、6月28日に酒田に着きました。最上川河口を挟んだ酒田と宮野浦の図を描き、酒田について「^{この}此所は羽州第一の津湊、市中三千余軒、商家にて人物言語大概にて、諸品乏しからず」と記しています。

酒田に一泊した一行は、翌日吹浦に向かいました。橘南谿のような目には遭っていませんが、「^{びょうびょう}此浜は眇々とせし砂浜にして(中略)荒浪立上がり見る目もおそろしく」とつづり、先年京都から松前侯に嫁いだ姫が、この辺りまで来た時に「これから先も国があるのか」と言って悲嘆にくれたという話も書いています。

古川古松軒 享保11(1726)年～文化4年(1807)

明治・大正・昭和（戦前）の来訪者が見た酒田



たやまかたい

田山花袋『田山花袋紀行集 第二号』 大正12(1923)年 博文館発行

自然主義作家として、明治文学に大きな足跡を残した田山花袋は、旅行が好きなことでも有名で、数多くの紀行文を残しています。山形県は母親の故郷でもあり、特に関心を持っていました。

田山花袋が見た酒田 明治26(1893)年夏に来酒

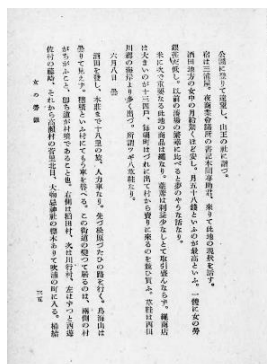
花袋が明治26年(1893)の夏に酒田を訪れた時のことを書いた紀行文「羽後の海岸」「最上川」が、展示している紀行集に収められています。

羽後の海岸には、秋田から人力車に乗って海岸を酒田まで南下してきた途中、金浦から見えた飛島について「飛島の風情に富めるは、われこれを耳にすること久し。(中略)我は車上遙かに其島の狭長なる翠色を望みつつ、頻りにさまざまなる空想に耽りぬ」と書いています。

また、酒田に泊まった夜は月が明るく、旅のさびしさをまぎらわすために日和山まで歩いて登り、これまでの人生を振り返っています。その時に日和山から見た光景は、花袋の目には「金波閃々として山翠微茫、宛然夢中の景に似たり」と、美しく幻想的に映ったようです。

「最上川」には、翌日、朝霧の中を再び人力車で清川に向かい、両羽橋を渡る頃には霧は薄絹を1枚ずつはがすように日が差してきたと書いています。

田山花袋 明治5年(1872)～昭和5年(1930)



やなぎだくにお

柳田国男『柳田国男先生著作集 第6冊』より「越後へ」(コピー)

昭和23(1948)年 実業之日本社/国立国会図書館デジタルコレクション

『遠野物語』を書いた民俗学の大家として有名な柳田国男。東京帝国大学法科大学(現東京大学)を卒業し、戦前は農務官僚、貴族院書記官長を務めました。「越後へ」は、農商務省農務局に勤務していた明治40(1907)、当時32歳だった柳田が北陸・東北の産業組合の視察と講演に回った時のことを書いたものです。

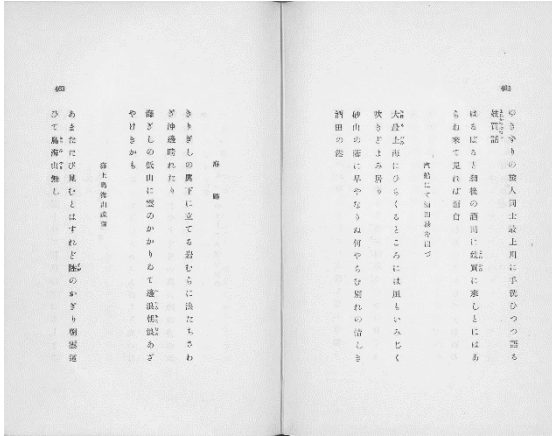
柳田国男が見た酒田 明治40(1907)年6月7日来酒

農務官僚として酒田を訪れた柳田国男。新潟県から鶴岡、松嶺(旧松山町)を経て、明治40(1907)6月7日に酒田を訪れました。松嶺については、庄内麴の産地と紹介。生産者が400戸以上あり、製品は酒田から大阪に送り、東京へも転送すると書いています。

酒田では山居倉庫を視察し、宿泊先の三浦屋で酒田商業会議所書記・本間専助から酒田の現状について聞いたことを記録しています。酒田地方の女中の月給は驚くほど安く、酒田港が繁栄していた時代が夢のようだとありますが、これは本間が言ったのか、柳田が思ったことなのかは分かりません。

また物産については、米に次いで重要な商品は縄で、大きな縄商店が13、4戸あると書いています。民俗学者としての柳田は、昭和13(1938)年、東京朝日新聞に連載していた「民謡覚書」に、当時は忘れ去られていた「酒田節」を取り上げ、光を当てています。

柳田国男 明治8(1875)年～昭和37(1962)年



わかやまほくすい
若山牧水『牧水全集 第2巻』より「北国行」（コピー）
 昭和5（1930）年 改造社発行
 国会図書館デジタルコレクション

旅と酒、自然を愛した歌人・若山牧水。大正6（1917）年に酒田を訪れた時に詠んだ歌5首が掲載されています。

若山牧水が見た酒田 大正6（1917）年8月6日来酒

大正6（1917）年8月6日夕刻。秋田で開かれた短歌会に出席した牧水は、鉄道を利用し新庄経由で酒田を訪れました。酒田に鉄道が通ったのは3年前の大正3（1914）12月のことです。

牧水は中学生の頃から古い港である酒田港にあこがれを抱いていたと、著書『旅とふる郷』に書いています。酒田に着いた日は町内一帯が停電しており、新町（現在の北新町・南新町）の遊郭に上がって酒を飲みながら、芸者が歌う「おぼこ節」を聞いて旅情にひたりました。

酒田には2日間滞在し、8日早朝の午前4時に、新潟行きの定期船「度津丸」に乗って酒田を発ちました。その時に甲板から見た日本海の光景を『北国紀行』に記しています。その文章と酒田で詠んだ歌が刻まれた歌碑が、日和山公園内の文学の散歩道に立っています。

若山牧水 明治18（1885）年～昭和3（1928）年



酒田と新潟を結んだ定期船「度津丸」
 明治十九（一八八六）年から大正九（一九二〇）年まで運航しました。手前は、出羽大橋ができた昭和四十七（一九七二）年まで運航していた、最下川の渡し船。明治末に撮影された写真です。



日和山公園に立つ若山牧水の歌碑

酒田で詠んだ歌のひとつ「砂山の蔭に早やなりぬ何やらむ別れの惜しき酒田の港」が刻まれています。



いわがさなみ

巖谷小波『俳味紀行 海から山』 大正10(1921)年 博文館発行

近代日本児童文学の生みの親であり、全国各地をめぐって「口演」を行った巖谷小波。この本には、大正10(1921)年5月に庄内各地で講演会を行った時の滞在記「庄内の五日間」が収録されています。庄内滞在中、巖谷を案内した佐藤良次が主筆を務めていた「酒田新聞」に寄稿した文章です。

巖谷は5月9日から12日の4日間、酒田や遊佐、松嶺(旧松山町)、余目、鶴岡など庄内各地を回って精力的な講演活動を行っています。最上川改修事務所長の野村年に頼まれ、酒田港の築港工事を行っていた作業員に話をするなど、大人を対象にした講演も多くあったようです。

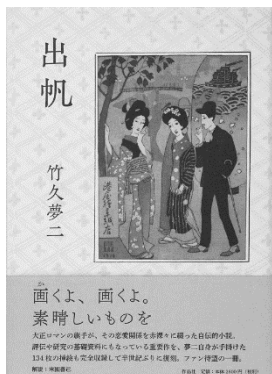


巖谷が宿泊した小幡の絵葉書(大正)

滞在中は料亭「小幡」に宿泊しています。旅館ではない小幡に泊まることができたのは、かつて巖谷の父親が泊ったことがあり、佐藤がそのことを話して頼んでくれたからでした。

滞在初日の夕食前、巖谷と佐藤は日和山を散策しており、「**此砂浜に瑞軒(賢)松と云ふのがある。これは有名な河村瑞軒が、米を運び込んだ遺蹟ださうだ。当年の港の繁華も坐ろ想像に難からぬ**」と書いています。今はなくなった瑞賢松は、酒田港のにぎわいを思わせるほど立派なものだったのでしょうか。

巖谷小波 明治3(1870)年～昭和8(1933)年



竹久夢二『出帆』 令和4(2022)年 作品社発行

昭和15(1940)年、夢二の死後に出版された自伝的小説の復刻版。主人公の三太郎が愛する土地として酒田を挙げています。

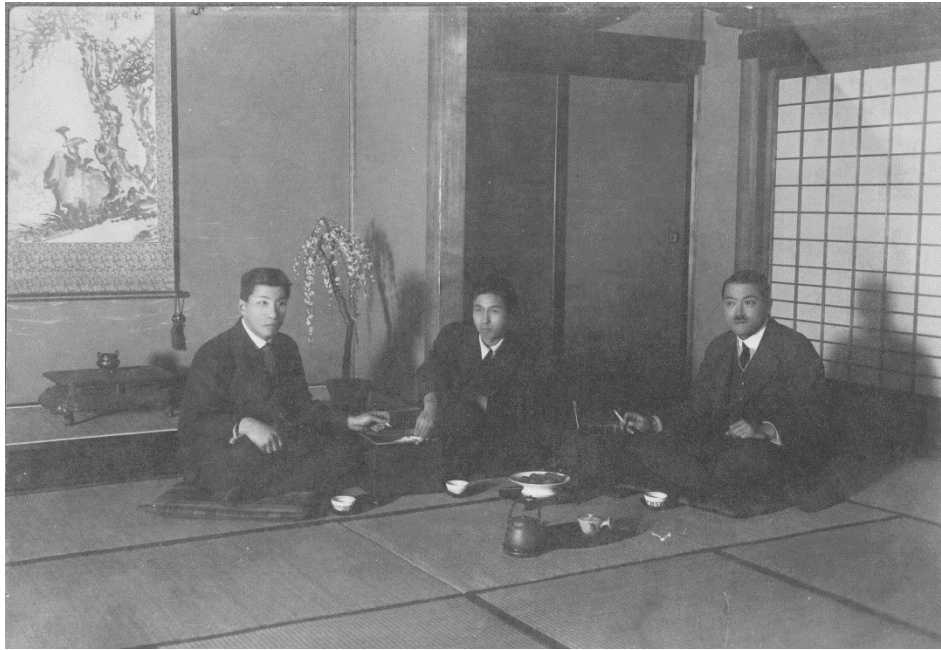
竹久夢二が過ごした酒田 大正10(1921)年、同11年、昭和5(1930)年来酒

夢二が最初に酒田を訪れたのは大正10(1921)1月30日。旅先で偶然知り合った大工町(現中町)の呉服商・後藤助太郎を頼って、庄内の雪景色を見に来ました。滞在中は、後藤の紹介で本町の富豪・森重治に支援を受け、料亭「宇八」(現山王くらぶ)を会場に盛大な画会を開き、鶴岡の湯田川温泉に出かけしています。

翌年の春、再び酒田を訪れて宇八に長期滞在しました。本来なら宿泊できない茶室に寝泊まりできたのは、常連客の森が頼んだからだといわれています。商人たちの注文に応じて何点もの絵を描き、多くの作品を酒田に残しました。

森との親交は夢二が亡くなるまで続きました。自伝的小説『出帆』には「**去年の春は酒田から湯田川温泉、横手、秋田と二月ばかりも歩いていた。ゆく先き先きに絵の好きな友達や知人がいた。酒田はことに好きだった。田川は忘れられない記憶のある所だった。そうだ、あすこへゆこう。庄内なら余生を送るのに不足のない土地だ**」と書いています。

竹久夢二 明治17(1884)年～昭和9(1934)年



料亭「宇八」でくつろぐ竹久夢二

大正10年(1921)年頃

大正ロマンを代表する詩人で画家の竹久夢二は、大正から昭和にかけて酒田に3度訪れています。初めて来酒した大正10(1921)年、料亭「宇八」(現在の山王くらぶ)で盛大な画会を開きました。翌年、再び訪れた際には宇八に長期滞在しています。

向かって左から、知人で酒田の呉服商・後藤助太郎、夢二、夢二を支援した地主・森重治。

昭和(戦後)の来訪者が見た酒田



マーク・ゲイン『ニッポン日記』昭和26(1951)年 筑摩書房発行

シカゴ・サンタイムズの日本支局長として、終戦直後の昭和20(1945)11月に来日したマーク・ゲイン。1年あまりの滞在中、占領下にあった日本の各地を取材しました。その記録である『ニッポン日記』の上巻には、来日から間もない12月24日に訪れた酒田での出来事を詳しく記されています。

ちょうど農地改革が始まろうとしていた時期であり、日本一の大地主といわれた本間家がある酒田は、敗戦後の日本の変化を見るのに最も適した場所だと考えたからです。本間家では、本間信吉、本間元也、本間祐介の各氏に、本間家と小作人の関係、農地改革に対する考え方などを聞いています。

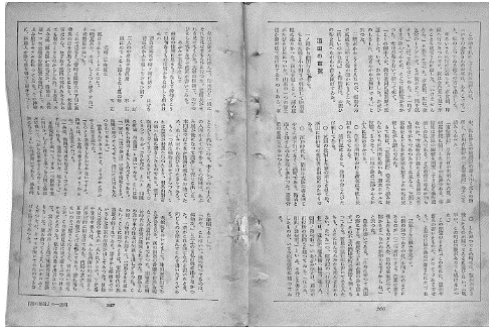
昭和44(1969)年、再び来日したゲインは、農地改革後の酒田の変化を取材しています。

マーク・ゲイン 1902(明治35)年~1981(昭和56)年

私が酒田へ来たのは結して偶然来た訳ではなかった。今度の旅行に出かける前、私は東京でいろいろ研究した。酒田は敗戦の日本に私が探し求めているいくつかの解答を得るのに最も適しているように思えたのだ。ここは新しい思想の侵入には抵抗の強そうな保守的な町だった。戦闘的な国家主義の伝統的な城塞としての酒田は反民主主義運動に沃土を提供するだろう。小さな堅固な田舎町としての酒田は、我々の政策にも日本民主化の難易に対処しても絶好の試験地となる。

最後に、だが決して重要でなくはない理由は本間と呼ばれる一族の存在だった。

マーク・ゲイン
『ニッポン日記』上巻より抜粋



「別冊文藝春秋」昭和27(1952)年10月号 文藝春秋新社発行
松尾芭蕉が「奥の細道」の旅で訪れた那須湯本、一ノ関、酒田を、
作家・井伏鱒二が1週間で巡った旅の紀行「『奥の細道』の一週間ー
芭蕉の足跡をたどる早まはり紀行ー」が掲載されています。

いぶせますじ

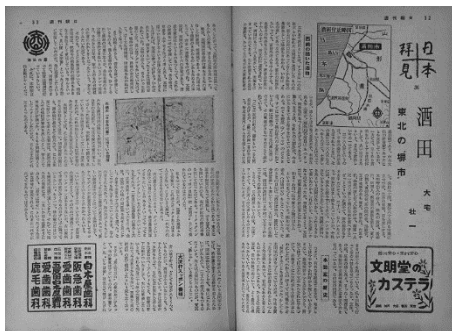
井伏鱒二が見た酒田

『山椒魚』『ジョン万次郎漂流記』などで知られる作家・井伏鱒二。大の釣り好きでもあり、昭和8(1933)年から同48(1973)年までに6回ほど酒田を訪れたうち、少なくとも3回は釣りを楽しんでいたようです。

井伏は、初めて来酒した時に案内役を務めた酒田の郷土史家・佐藤三郎と親交を深め、酒田に来ると佐藤家を訪ねていました。奥の細道早まわりの旅では、佐藤の案内で本間美術館を訪れ、芭蕉が近江屋三郎兵衛(俳号は玉志)に招かれた折に、瓜のもてなしを受けて即興で詠んだ句をしたためた「玉志亭唱和懷紙」(山形県指定文化財)を見えています。

その後はやはり釣りをするために、佐藤とともに最上川の川口(酒田港)に行き、釣り船から見えた夕景を「夕方が近づくにつれ、鳥海山の七合目あたりの紅葉してゐる箇所が、灰色の雲のやうに見えて来た。月山や湯殿山は、藍色に見えてゐた。さっぱりした気持ちのいい遠望だが(後略)」とつづっています。

井伏鱒二／明治31(1898)年～平成5(1993)年



「週刊朝日」昭和29(1954)年7月4日号 朝日新聞社発行

「日本拝見」というシリーズ記事で、酒田を「東北の堺市」と紹介しています。筆者はノンフィクション作家・ジャーナリストの^{おおやそういち}大宅壮一。山居倉庫や本間美術館、鑑谷家の写真も掲載。

おおやそういち

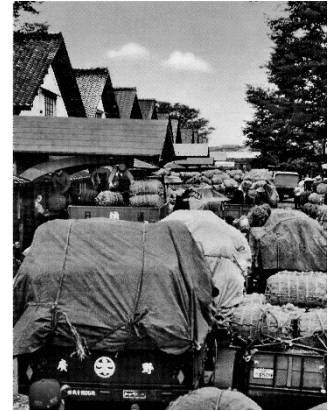
大宅壮一が見た酒田

日本拝見には、『日本永代蔵』に書かれた鑑屋や山居倉庫、海向寺の即身仏などに触れていますが、ジャーナリストである大宅が特に関心を寄せていたのは、敗戦による日本の混乱期以降の本間家だったようです。来酒時には、本間物産の社長などを務めた本間祐介にインタビューを行っており、その時に聞いた話をもとにしたと思われる内容が記事の中心になっています。

祐介は分家に生まれましたが、早くに亡くなった9代当主・光正に代わって本間家を切り盛りしていました。戦後間もなく本間美術館を設立し、酒田の文化の発展にも尽くした人物です。大宅は記事の中で「温厚とか重厚とかいう言葉が、これほどピッタリあてはまる人は少ない。こういう人柄は、一代や二代ででき上がるものではないと思った」と評しています。

城下町的性格を残す鶴岡に対して、酒田は庶民的で文化的として、本間美術館では年中絶え間なく展覧会や講演会を行っていることも評価しています。

大宅壮一 明治33(1900)～昭和45(1970)



昭和37(1962)年頃に発売された絵葉書「観光の酒田」

江戸時代の「酒田十景」とはだいぶ趣は異なりますが、観光土産として販売されていた絵葉書です。
上段向かって左から「酒田港」「酒田港西埠頭」「商店街」「日和山公園」「本間美術館」「山居倉庫」。



酒田港本港で釣りを楽しむ人々 昭和30年代後半

左は、昭和30年代後半の本港地区の様子。大人も子供も、石垣だった岸壁から水際まで下りています。右は、昭和34(1959)年の突堤での釣り風景。港湾整備で造られた南突堤は、太公望たちの格好の釣り場になりました。

土門拳が写したふるさと酒田



「婦人画報」昭和32(1957)年8月号

婦人画報社発行

企画ページ「みちのくの港町－酒田風物詩－」に、土門拳が酒田山王祭(酒田まつり)のぎわいや、酒田の風景を撮った写真17点が掲載されています。幼い頃に酒田を離れた土門は、この企画の撮影のために40年ぶりに酒田を訪れました。

土門拳が40年ぶりに見たふるさと

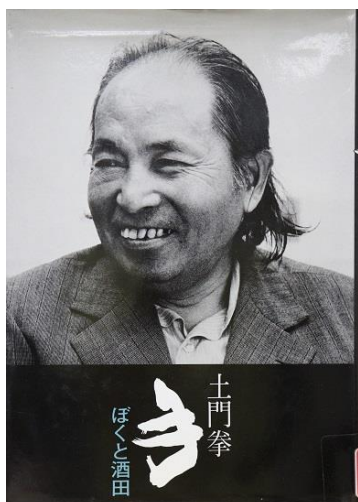
大正5(1916)年、6歳の頃に酒田を離れた土門拳は、昭和32(1957)5月18日、雑誌『婦人画報』の企画で酒田山王祭を撮影するため、およそ40年ぶりに酒田にやって来ました。

『土門拳 手 ぼくと酒田』によると、酒田に着いた土門は早速、子供の頃に暮らした家を探しに出かけました。家の面影はなくなっていました、場所を確認することはでき、それから山王祭の撮影にかかりました。機関銃のような勢いで写しまくり、酒田でだいぶフィルムを買い足しながら撮影したようです。

酒田滞在中に案内役をした本間美術館副館長・佐藤三郎(後に館長)に送った葉書には「下手な写真ながら酒田を全国的に認識させ、観光のいざないに少しでも役立てばと思います。いろいろ撮り足らず、不十分なことが今になるとくやまれます。しかし、四十年振りの故郷がよくある地方都市みたいになびれていずに、新興の活気にみちていたことは、何よりの喜びであり、安心でした」とつづっています。

土門は昭和49(1974)年に最初の酒田市名誉市民になり、昭和58(1983)年には日本初の写真専門美術館として土門拳記念館が設立されました。そのきっかけが、この40年ぶりの里帰りだったのです。

土門拳 明治42(1909)年～平成2(1990)年



『土門拳 手 ぼくと酒田』

昭和58(1983)年

土門拳記念館発行



「アサヒカメラ」昭和53(1978)年1月号 朝日新聞社発行

「土門拳－その周囲の証言」の連載第1回を掲載。昭和32年の来酒時に案内役を務め、酒田の歴史・文化の分野で長く活躍した佐藤三郎が、幼少期の土門について書いています。

来訪者が見た酒田の食と文化



「文藝春秋」

昭和32(1957)年12月号

文芸春秋新社発行

文芸評論家・英文翻訳家の吉田健一の連載記事「舌鼓ところどころ」に、「山海の味・酒田」と題して酒田の食を取り上げています。

よしだけんいち

吉田健一が酒田で食べたもの

吉田健一がこの記事のために訪れたのは今町(現日吉町)の料亭・相馬屋(現相馬樓)でした。10月14日の夕方4時に酒田に着いてから、2日後に帰るまで、朝から晩まで相馬屋に居続けて庄内の味を楽しみました。

吉田が味わったのは、南蛮エビ(甘エビ)、飛島のアワビやイゲシ、最上川のサケ、タイ、ハタハタ、庄内麩、木茸などの食材を使った料理の数々。木茸は記事の内容から、松林に生える「松露」というキノコのことのようです。昔は光ケ丘の松林で当たり前に取れましたが、今では高級品になっています。

ほかに庄内柿やイチジクの甘露煮など、庄内の秋の味を満喫し、その一つひとつの味わいをレポートしています。

ほかの店を食べ歩かなかったのは、^{うま}旨いものが行き渡り、それが普通の食事として楽しまれている場所なら、信用できる店で1日中食べることで、その地方の旨いものが食べ尽くせるという持論があったからでした。「酒田でこの理想を実現した」と書いています。

庄内米と豊富な海の幸、山の幸。酒田が恵まれた土地であることを再認識させてくれます。

吉田健一 明治45(1912)～昭和52(1977)年



「週刊朝日」に紹介された

映画館グリーン・ハウスの記事

朝日新聞社発行「週刊朝日」昭和38

(1963)年10月4日号より

よどがわながはる

淀川長治が世界一と絶賛したグリーン・ハウス

終戦からほどない昭和24年(1949)に洋画専門の映画館としてオープンしたグリーン・ハウス。日本を代表する映画評論家・淀川長治が世界一と絶賛し、週刊朝日に取り上げられました。

「港町の"世界デラックス"映画館」と題された記事では、厚い布張りをしたゆったりサイズのイス、貸し切りで使える2つの特別室、館内のあちこちに飾られた生け花、ロビーでのお茶のサービスなど、お客さんが心地よく映画を楽しめることを第一に考えて、至れり尽くせりのサービスを実行していることが紹介されています。

この前年の夏に、定員10人の小映画室で質の高い映画、好評だった旧作を選んで上映する「シネ・サロン」を始めており、それについても「小ささといい、設備といい、世界一であるのは間違いない」と書いています。

酒田らしい「進取の気風」を感じさせ、市民にとってあこがれの場所でもあったグリーン・ハウスはこれからも語り継いでいきたい酒田の文化のひとつです。

天保時代の酒田のにぎわいを描いた塞道絵幕

おすわりだいさいじ さかいこうごあんどうしゅくえん
「大壽和里大祭事—酒井侯御安堵祝宴—」

酒田には「塞道の幕見」という小正月行事がありました。町ごとに、さまざまな絵を染め抜いた大きな絵幕「塞道幕」を屋外の板塀などに飾り、その周りには屋台なども出て、子どもも大人も楽しんだお祭りです。塞道幕には合戦絵など歴史を題材にした絵や、縁起物の絵が描かれました。

展示している「大壽和里大祭事-酒井侯御安堵祝宴-」は、天保11(1840)に幕府から命じられた庄内藩の越後長岡への転封(天保の三方領知替)が、領民の一大阻止運動によって中止となったことを喜び、大祝宴でにぎわう酒田の町の様子が描かれています。

絵幕には「塗師 土門與三郎^{よさぶろう}」「画工 佐藤長吉 柿崎金蔵」とあり、その中の土門與三郎は、酒田生まれの写真家・土門拳の祖父といわれています。



酒田市指定文化財 塞道絵幕「大壽和里大祭事—酒井侯御安堵祝宴—」 天保時代
高さ1.97メートル×横幅9.7メートル



絵幕には、^{すいか}西瓜を振る舞う人の姿が描かれています。その後ろには、まな板に載せた西瓜をふたつに割っている人がいます。

これは「西瓜を割る」→「おすわる(お座る)」、つまり「転封中止」を意味する判じ絵になっています。

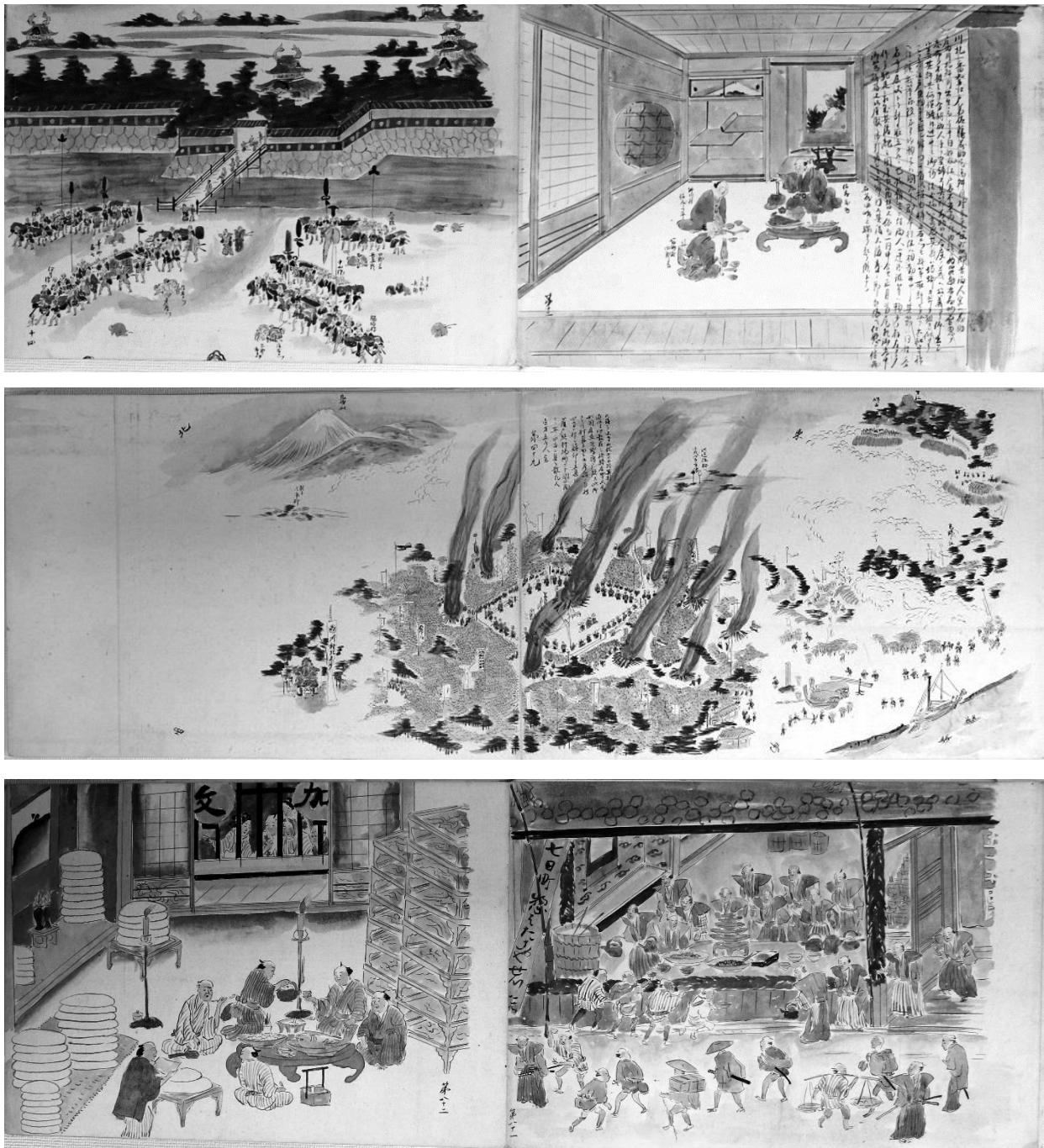
庄内を揺るがした「天保の三方領知替事件」

天保11(1840)年11月、幕府は武蔵国川越藩の松平氏を庄内へ、庄内の酒井氏を越後国長岡へ、長岡の牧野氏を川越へ移す「三方領知替」を命じました。幕府がこの時期に三方領知替を行おうとした理由は明らかではありません。

14万石の庄内から7万石の長岡への転封は、藩主や家臣だけでなく領民にもショックを与えました。次の藩主による再検地や増税に対する不安を募らせた領民たちは、転封を阻止しようと立ち上がり、庄内の全農民が参加した大規模な一揆へと発展。「百姓たりとも二君につかえず」の幟を掲げた大集会を開き、幕府要人や諸大名への直訴・出訴を繰り返しました。

そのような中で幕府は天保12(1841)7月に転封の命令を取り消します。11代将軍・徳川家斉死去による幕府内の情勢の変化など理由はさまざまありますが、領民が一丸となった運動があったからこそその転封中止でした。

庄内藩を揺るがし、幕府の弱体化を示したこの事件は「天保義民事件」ともいわれ、鶴岡市出身の作家・藤沢周平は小説『義民が駆ける』の題材にしています。



「夢の浮橋」(写本)

庄内藩主・酒井氏の転封阻止運動の全容を、70点を超える絵で記録したもの。当事者の一人だった真柄小文吾(加茂屋文治)が文書・記録をまとめました。真柄は鶴岡で宿を営むかたわら庄内藩の目明しを勤めました。絵は大柳金右衛門が描いています。

鶴岡市の致道博物館所有の3巻の絵巻、酒井神社(鶴岡市大山)所有の5巻の絵巻があり、この画帳は酒井神社本の写本で、制作者、制作年代は不明です。

江戸時代の一揆の経緯や結果が絵に残されたものは極めて少なく、非常に貴重な歴史資料となっています。

展示している場面はすべて天保12年の出来事。上段右は「正月中旬 籠訴(幕要人への直訴)の相談のために、公事宿の紀ノ国屋を訪ねる」、左は「正月20日 初めて籠訴を決行」。中段は「2月1日 酒田の大浜で山伏が護摩を焚き、15000人の大集会を開く」。下段右は「7～8月 転封中止を祝い、鶴岡七日町の旅籠屋仲間が酒や餅をふるまう」、左は「7月22日 加茂屋文治宅で、郡代や代官などへの献上品や宴会の準備を進める」。